

平成二十九年四月十日発行
皇學館論叢第五十卷第二号 抜刷

書評

半田美永著 『近代作家の基層——文学の〈生成〉と〈再生〉・序説』

永
栄
啓
伸

半田美永著 『近代作家の基層——文学の〈生成〉と〈再生〉・序説』

永 栄 啓 伸

波乱の多い生活を送ってきた評者の目には、半田美永氏の健全で着実な生き方が晴れやかに見える。そうした人生の過ごし方は文学研究の姿勢にも重ねられ、長年の堅実な積み重ねの成果が、何のケレンもない素直な集大成として、四〇〇ページを越える大著にまとめられたことを心から慶びたい。

作品を読み、考えることが、自己を高め、探求することであつてみれば、「作品のいのち」がなおざりにされた昨今の文学研究に不満を抱くのも当然である。人を思いやることと同様に、作家や作品のいのちを大切に読み取るうとする信念のもとに、孤立した営為としての文学研究に向かう姿勢を次のように記している。

ある時期から、近代文学に関する学術論文には、作品のい

のちが息を潜め、その魅力が伝わらないものがあるのに気づいた。一体、何のための研究なのか。論文を読むより、作品それ自体を読む方がはるかにおもしろい。研究によって、作品が封印され、作家の魅力や可能性を限定してしまうこともあるのではないか。(中略)本書に集めた文集には、私の関心によつて書かれた質しいながら、しかしある傾向が現れていることに気づく。それは、それぞれの作品に底流する〈さけび〉〈いかり〉〈かなしみ〉〈くるしみ〉〈よみがえり〉〈よろこび〉〈いのり〉など、であり、それらの作品には、異質な世界との衝撃によつて壊れ、そして〈再生〉するさまが描かれていた。それらは、ことばを介在することによつて、また別の様相を見せることもある。その

世界とは、作家の内奥の孤独や苦悩や哀しみとのたたかいかから発せられるものであるだろう。作品は、やはり作家の産物なのだと思うようになった。作家と作品とは不分離ないのちを共有し、作品によって、作家もまた深化（進化）成熟しているからだ。

本書のねらいをよく表した一節であろう。「作品に秘められたいのちをひきだす」ために読みの必要性を説きながら、「理論に整合しない作品は、ダメな作品だと思つて錯覚が、いかに傲慢な読者を作ってきたか」と牽制しつつ、研究のための基礎資料の重要性を語るのである。

「文学とは人間を培う学問」だとする著者が、個々の作品に伏流する〈情念〉をいかに掬い取り〈再生〉を読み取れるか。そのような意図のもとに構成された本書は、次の四部分に分かれる。すなわち、Ⅰ 近代作家の基層 Ⅱ 作家の登（評論・エッセイ） Ⅲ 熊野・伊勢〈紀行・インタビュー・講演録〉 Ⅳ 阪中正夫作品【小説・放送台本】—— 解題と本文—— である。

ちなみに、Ⅰ部の論文の章立てを見てみる。

第一章 文学にみる西方志向——折口信夫『死者の書』の場合

第二章 歌集『海やまのあいだ』の基層—— 沼空の揺曳と

覚悟

第三章 別離からの出発—— 天田愚庵『順礼日記』攷

第四章 鷗外における独逸体験と《東洋》—— 『舞姫』から

歴史小説へ

第五章 斎藤茂吉の紀伊半島・熊野—— 『念珠集』の風景

第六章 佐藤春夫『風流論』の基層—— 『熊野路』の伏流水

第七章 母と娘の相克と愛—— 有吉佐和子『香華』 試論

第八章 丹羽文雄『青麥』の位置—— 「まん中」からの脱却

第九章 丹羽文雄における《母と父》—— 『親鸞』への道のり

第十章 井上靖『孔子』の旅—— 「逝くもの」の彼方に

第十一章 阪中正夫『抒情小曲集』 生まる、映像』の誕生

第十二章 近代文学の土壌—— 和歌山県の場合

目次からはつきりと見えてくるのは、これほど広汎にわたる作家と作品を論じながら、その視線の行く手には、和歌山があり伊勢があり、熊野があり、紀伊半島があるというテーマの統一性である。早くから、著者は東京（中央）に相對する地方と風土という視点を持ち続けてきたが、その延長上に紀伊半島を移すと、古都奈良・京都に對峙する熊野という構図になり、「〔紀伊半島〕に埋藏する歴史的文化的遺産」への文学的アプローチがなされてきた成果と言えよう。

とりわけ、地方や風土への関心の深さを示すのは、Ⅲ部に収められた「波及する近代、創造する熊野」である。これは「国文学解釈と鑑賞別冊 熊野」その信仰と文学・美術・自然」に発表されたものに加筆訂正を施したのだが、折口信夫、佐藤春夫、中上健次、岡本太郎、前登志夫などを引きながら、作家の目に熊野がどのように映ったかを検証している。中上は「固有の精神文化」を育んだ熊野を意識しながら「半島を（負）の要素を抱え込む地域と考えた」けれども、一方坂口安吾は「伊勢を見据えて」「歴史の変動にも殆ど影響を受けなかった」という対照的な観点にも、「古来不変の要素が埋蔵されている」点に共通項を見出している。また興謝野鉄幹、田山花袋など文人たちの熊野訪問にふれ、さらに作品に取り込まれた熊野を論じて三島由紀夫、井上靖、司馬遼太郎などを扱っている。南国の明るさを強調する佐藤春夫に対して、「熊野の抱える光と闇」を読む中上健次などを通して、著者は熊野を「仏界でいう穢土と浄土が混在する「聖地」であり、それゆえにこそ「敗者」をも受け入れる器として存在したのである」と結論づけている。信仰の場としての視点も加えて、「熊野」を死と再生のトポスと見なす考えは、そのまま著者の抱く人生観と共鳴するものである。

このように多くの作家や作品を丹念にたどり適確に位置づけ

半田美永著『近代作家の基層——文学の〈生成〉と〈再生〉・序説』（永栄）

る作業は、渉猟に定評のある著者の得意分野の一つであろうが、『紀伊半島をめぐる文人たち』（のち増補『文人たちの紀伊半島』二〇〇五年 皇學館大学出版部）を著書に持つ半田氏にしかできない、幅広く目配りのきいた論考として読んだ。

さて、紀伊半島への熱いまなざしに呼応するかたちで、Ⅰ部の作品論は書かれているのだが、いま逐一検討する余裕はない。評者のきわめて偏った関心にしたがえば、第三章の「別離からの出発」は、天田愚庵への緻密な調査によるもので、京都から伊勢路をたどって熊野までの旅を記した『順礼日記』を紀行文学ととらえ、その生涯に「苦難と犠牲の上に培われた明治の高質な精神」の再生を読む展開は、清水次郎長の登場も相まって、さながら一編の物語を読む思いであった。

また、第十章の「井上靖『孔子』の旅」では、「逝くもの」を従来の無常という解釈ではなく「厭世的絶望感は払拭されている」として肯定的にとらえ、「負函」の地が、井上靖にとって故郷願望に通じ、また物語の構成上、この地を境に語り手と作者が一体化することなど、こころの故郷にいたる経緯を明解に論じている。そして「逝く川」の彼方には、理想の世界があることを暗示するのみ」という個所に「生の哲理」を見る。

このような川と故郷と作者の生い立ちの問題は、Ⅱ部の「有

吉佐和子と歌舞伎」で論じられる『有田川』の世界とも通底する。またそれは『紀ノ川』の末尾で、華子が和歌山城の望遠鏡を通して河口に広がる海を眺め、「茫洋として謎ありげな海」に未来を空想することにも符合しよう。幼年期を過ごすことになかった〈幻影のふるさと〉を持つ有吉佐和子について次のような記述がある。

有吉佐和子の描く「川」は、時代をも取り込みながら、意志的に生育してゆく女性の可能性と不分離の関係にある。作品『有田川』も決して例外でなく、むしろここに描かれる千代こそ、家やしきたりの呪縛からも潔くみずからを解き放ち、新しい生を獲得してゆく出色の「女」なのである。その過程に「川」や「水」の力学は、大きな役割を担っている。

たしかに、『香華』を論じた第七章の「母と娘の相克と愛」においても、「寄せる波はあつても返す波が無いという」「片男波」の波音を聞きながら、朋子と母郁子が対立から同化に向かうとき同様の機能を感じ取ることができる。有吉作品に認められる「型の対立」を、むしろ調和への道筋だと見なす著者の姿勢が鮮明にうかがえる。

作者の生い立ちという点では、第九章の「丹羽文雄における《母と父》」も深く関わっている。自分の小説は自伝小説だが

「写実的な私小説ではない」と言明し、「現実にはおこらなかつた可能性を多分に描いている」と自解した点に焦点をあて、「可能性」をキーワードに内実の変容を読んでいる。元来これは生母の美化というような虚構の可能性を示唆したものが、現実には二児を置いて旅芸人と出奔した母や「救いようのない行為」の父を描くことが、「ほかならぬ自己」を把握し「自己」を語ることであったと気づく「作家の自覚」と苦悩に言及する。そのような父母を描くことによって、〈人間親鸞〉の悩みが理解でき、自らの罪を犯す可能性を回避させてくれたという苦しい背理を背負って、小説「親鸞」を書くにいたる過程をくわしく論じている。出自の問題を原点にもつ作家の特色と独自性を指摘しつつ、親鸞へ傾斜する丹羽にとつて、それは「自己を再生させる営みであり、母と父の塑像をみずからの手で構築することであった」と述べて、『事実』が〈作品〉として再構築される手順を読む。伝記的事実と作品世界が重なることの多い作家だが、その足跡を検証するとは「丹羽文学を丹念に読み、その文学の本質を発見するという意味であり、現実のいっいちを確認することは違う」と断言するところに著者の方法論が表明されている。

思えば、作品の読みとは、伝記的要素を踏まえ、作者の意図や作品自体が自律的にもつ意味性をとらえ、さらに研究者の分

析が加えられた包括的な作業だと言える。著者はその核を「作品のいのち」と呼んでいるが、作品の解釈が作家への単なる廻行ではなく、さらに本質に直結するような読みを目指しているのである。

たとえば、親鸞の中に発見したものと「これまで作品において追究してきた『可能性』との統合」に「丹羽文雄の真実の〈宇宙〉」を見ようとするように、綿密な調査と丁寧な読みを通して作家の全体像にまでたどり着こうとする本書の構想は、大きく豊かなうねりをもっている。うねりの源は、作家論や作品論や読みをささえる基礎的研究への揺るぎなき確信と実践である。その熱情と真摯なまなざしが『近代作家の基層』という書名を冠する所以であろう。そして、長年におよぶ研究生活で関わった人々に対して敬意を払い感謝しながら、「副題となった〈生成〉と〈再生〉とは、ほかならぬわたくし自身のためだったかもしれない」と記すとき、文学研究とは何であるのかを改めて問い返される思いがした。ここではその一端にしか触れられなかったが、今後さらに〈半島〉への命題が発展、深化することを期待している。

(和泉書院、二〇一七年三月三〇日発行、

四〇八頁、本体価格五〇〇〇円)

(ながえ ひろのぶ・近代文学研究家)

半田美永著『近代作家の基層——文学の〈生成〉と〈再生〉・序説』(永栄)